

## 絵の活用の実践

### —6年生国語科「『鳥獣戯画』を読む」「この絵、わたしはこう見る」の学習を通して—

濱村 久美 (大田区立蒲田小学校)

#### 1 実践のねらい

日本語学級の通級児童は、日本語学級の授業では、習得レベルに合った学習を進めることができる。しかし、在籍学級の授業では、他の児童と同じ教材を読んだり、作文を書いたりする。

今回の実践では、「絵を用いた指導で教材の理解を図り、表現の意欲を高める」ことと、「学年の教科学習に必要な文型や語彙を増やし、文を書く力を育てる」ことをねらいとした。

#### 2. 実践の場の特徴と対象児童について

##### 2.1 実践の場の特徴

蒲田小学校日本語学級は、東京都の公立小学校に設置された日本語の通級指導学級である。校内外四十数名を4人の教員で指導する。児童は、母語話者による初期指導60時間を経て日本語学級に入級する。1～4名の個別・少人数指導で1回2時間、週1～2回、週2～4時間通級している。学校内外の時間割を調整するため、国語の授業全部を指導することはできない。

##### 2.2 対象児童

A 児：来日約1年、6年生児童(中国語圏)

B 児：来日約2年、6年生児童(英語圏)

##### 2.2.1 話す・聞く力

2名とも日常会話は聞いて理解できる。A 児は、自分から話すこと少ないが、質問をすれば1、2語文で答える。自己紹介のような文を練習しておく、言うことはできる。B児は、よく話し、語彙も増えて、学校での出来事などについて会話できるようになっている。

##### 2.2.2 読む・書く力

2名とも平仮名・片仮名と3年生の漢字は、ほぼ読み書きできる。母語の読み書きもでき、電子辞書で単語を示すと理解できる。漢字学習の短

い例文作りも理解して書いている。しかし、6年生の長文教材の読解や段落のまとまりのあるようなや作文を書くことは困難で、特にA児は作文で何をどんな順序で書くかが分からない様子で、助詞や表記の誤りも増えがちである。

#### 3 教材について

##### 3.1 教材名

「『鳥獣戯画』を読む」(高畑勲著) 「この絵、わたしはこう見る」(出典：光村図書6年国語)

##### 3.2 単元の見どころ

##### 3.2.1 「国語」としての主な見どころ

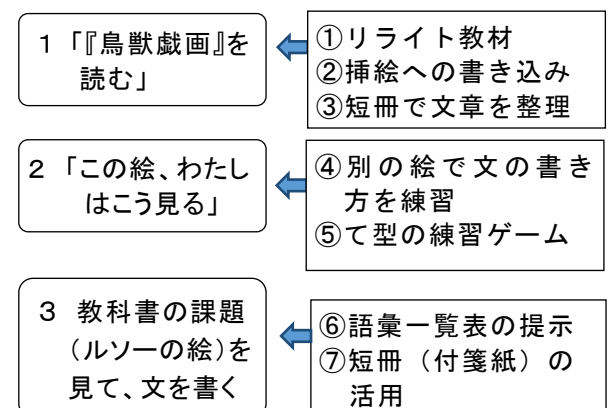
- ①絵と文の関係を押さえて筆者の考えを読む。
- ②絵から感じたことの中から書くことを決め、全体を見通して事柄を整理する。
- ③必要に応じて絵の様子を簡単に書いたり、詳しく書いたりする。

##### 3.2.2 「日本語」としての主な見どころ

- ①絵を見て何がどういう様子をしているか話す。
- ②絵と文を比べながら、「鳥獣戯画を読む」のリライト文のだいたいの意味を理解する。
- ③絵を見て分かることと、それから感じられることを簡単な文で書く。

#### 4 指導の流れと支援について

平成27年11月 9時間扱いで指導



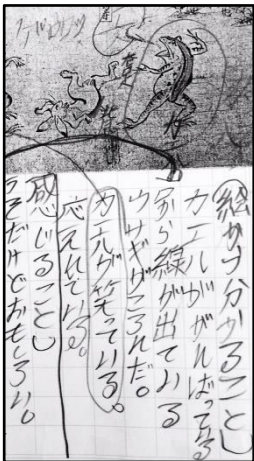
#### 4.1 リライト文と挿し絵の活用 (支援①・②)

児童の日本語習得程度に合わせて文の量を教科書文の60~70%にしたリライト文を作成した。6年生の発達段階や学年に応じた知識に配慮し、平安時代・江戸時代などの言葉はあえて残した。教科書と同じ挿絵も添え、ノート指導の際も挿絵に書き込ませながら指導した。(写真1)

#### 4.2 別の絵で文の書き方を練習 (支援④・⑤)

グランマモーゼスの「春うらら」をモデルに「木がある。子どもが遊んでいる。」のような文型を練習し、動詞カードを使用したゲームで、「～ています。」という練習も行った。(写真2)

##### 1 【児童のノート】

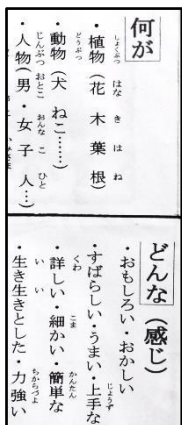


##### 2 【春うららの指導】

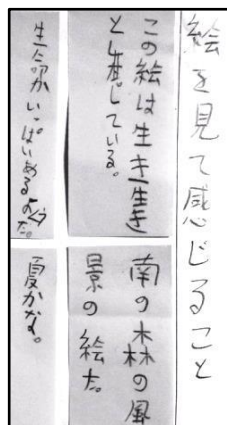


#### 4.3 語彙の一覧表と短冊の活用 (支援⑥⑦)

課題のルソーの絵を見て文を書く活動では、語彙の一覧から言葉を選んで文が書けるようにした。「～がある/いる」「～が～している」「～ようだ/みたいだ」などの文型で短冊(付箋紙)に書かせ、その短冊を並べて文を書かせた。(写真3・4)



##### 3 【語彙の一覧(部分)】



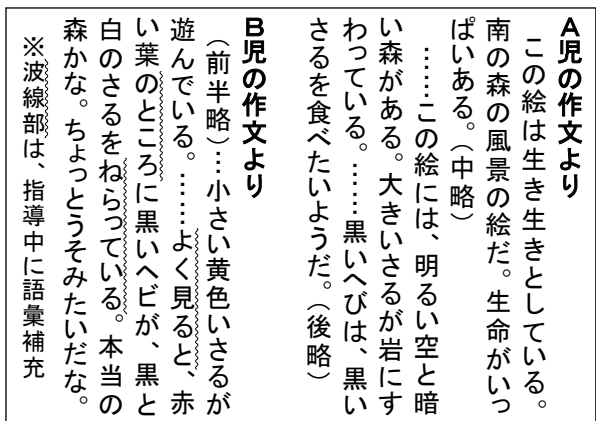
##### 4 【短冊(付箋紙)の活用】

#### 5 児童の学習の様子など

A児・B児ともに集中して学習し、『鳥獣戯画』を読む」の文の概要は理解でき、課題の絵について原稿用紙1枚弱の文を書くことができた。

『鳥獣戯画』を読む」の指導中に、B児から「この前の日本語の勉強をクラスでもやった。今日の勉強も使いたいから、ノートに書いていい？」という発言があった。また、在籍学級の担任の先生から「クラスの学習の前に、少しでも内容が分かると助かります」とのコメントがあった。A児の作文を書く活動では、始めは数行しか書けず、難しい表情をしていたが、付箋を並べて、原稿用紙に書けばよいことが分かると「あー(分かった)」と言って、笑顔になって書き進めた。

その後、清書しながら語彙を補充したり、表記を直したりして、以下のような文章を書いた



#### 6 考察と今後の指導

「絵を用いた指導」で本実践のねらいの「教材の理解を図り、表現の意欲を高める」ことはできた。児童は、「手に棒を持っている。へびを打ちたいようだ。」など、指導者が予想しなかった部分も読み取り、感心することも多かった。しかし「教科学習に必要な文型や語彙を増やし、文を書く力を育てる」には、習熟が必要である。また、語彙の一覧は作文の手がかりとして役に立つが、児童の書きたい内容を表現するには足りない。

今後、自力で文を書くには、辞書で言葉を調べる指導や書く内容をまとめる指導、そして、児童自身がいろいろな言葉に触れて、その言葉を活用する意欲を高めていくことが大切と感じた。